魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：宮川 雄基　所属：姫路市立書写養護学校　記録日：2020年 2月 21日

キーワード：余暇支援、観察、OAK、VOCA、聴覚過敏、環境調整

【対象児の情報】

・学年 小学3年

・障害名 重度重複障害

・障害と困難の内容

2019 年の春。小学3年生の A 君の担当になった。いつも元気いっぱいで、休むこともほとんどない、クリっとした目が可愛い A 君。でも、進学当初、困ったことがあった。

そんな A 君を見て、次のことを思った。

A 君のこと、わからないことがたくさん。もっと理解したい。でも、何から始めたらいいんだろう…。悩みに悩んだ1学期。特に考えたのが「A 君にとっていい生活ってなんだろう？」、ということであった。関わる中で、「**苦手な音や活動などが少なく**」て「**得意な活動や安心して取り組める活動があって**」、できるなら「**苦手なことを伝えたり、やりたい気持ちを上手く伝えられたりできる**」ような生活だったら、A 君にとって今よりもちょっとだけいい生活なんじゃないかな、そう思うようになった。そう考えると、A 君が日々困っている様子は、“***A 君の活動しやすい環境が整っていなかったり***”、“***A 君自身も過ごし方がわからなかったり***”、“***うまく相手に伝えるコミュニケーション手段を持っていなかったり***”することが原因ではないかと、ぼんやりながら思うようになってきた。

・A 君がどのように周りの環境を理解しているか探ることで、A 君をよりよく理解することに繋がるのではないか。
・それを踏まえて、A 君が苦手な場面と安心して過ごせる場面を探っていくことで、A 君にとって過ごしやすい環境を整えていくことに繋がっていくのではないか。
・A 君がどのように表出しているかを探っていくことで、A 君のコミュニケーション力が向上したりすることに繋がるんじゃないか。

このようなことを思った。これが、この実践の出発点である。

【活動目的】

A 君と過ごす上で、今年度次のような目標を立てて、実践に取り組むことにした。

目標1　A 君がどのように周りの環境を把握しているのかを探る。
目標2　A 君が苦手な場面と過ごしやすい場面の両方を探る。
目標3　A 君が過ごしやすい環境を整えて、どのようなことをどのように表出したりしているのかを探る。

実施期間は、2019 年 4 月～2020 年 2 月、実施者は宮川雄基で、児童との関係は担当である。

【活動内容と対象児の変化】

～目標1　A 君がどのように周りの環境を把握しているのかを探る～

毎日の学校生活。A 君にはどんな風に見えているんだろう？A 君にとって過ごしやすい環境を整えるため、まずは A 君を理解するところから始めた。

取り組み①

視覚や聴覚等の実態把握を行いながら、A 君はどのくらい見通しが立っているのか、まとめていくこととした。結果は次のようになった（表1、表2）。

表1　A 君の環境把握まとめ

	感覚ごとに分類した様子	考えられること
視覚	○明暗は認識している。 ○1mほど先の物に対して手を伸ばすなど、どんな物でも見えている様子である。 ○教室を暗くし、2mほど離れた場所でテレビを流したら、少しの間じっと見ていた。これより遠い物に対しては、手を伸ばしたり目を向けたりする様子はあまり見られなかった。(※3) ○視力検査の結果は、0.02 であった。	あまりはっきりとは見えていないのでは？
聴覚	○小さな物音にもよく反応があり。 ○過敏さが見られる時があり、突然の音や拍手などに対して、泣いたり手を噛んだりする様子が見られる。	聴力は問題ない(※4)
前庭覚	○バランスボード等で傾きを加えると、平衡を保つよう重心を真ん中に戻そうとする動きが見られる。 ○介助歩行をしている時に傾くと、支援者の手をギュッと掴む。	傾きを認識して

		いる
認知	○言葉の雰囲気は感じている様子もあるが、意味は理解していない様子である。 ○絵カードやシンボルを認識している様子はない。	言葉をメインにしたやり取りは難しいかもしれない(※1)
操作	○指の細かい操作は難しい。 ○親指とその他の指で物を握ったりすることが可能である。 ○長い時間物を持ち続けることがあまりなく、掴んだ物をすぐに投げることがほとんどである。	
移動	○歩行器や介助歩行で足を前に出して進むことはできる。 ○床に降りたときにずり這いや寝返りを打つことはできない。自力での移動が難しい。	

表2　どのくらい見通しが立っているか

動く物には?	○歩行器を隣の部屋から運んでくると、「ガラガラ」という音に対して意識を向けている。右から歩行器が近づけば右を向き、左から近づけば左を向く。右から左や、左から右に、歩行器が移動すれば、それらの歩行器を追うように顔を動かした。(※2)
やっていることを中断すると?	○手に持っているチェーンを取ると、手を噛んだ。 ○VOCA の中に曲を入れると、押す動きが見られる。電池が切れて VOCA が再生されなかった時には、手を噛む様子が見られた。
次にすることは、どのくらい予測している?	○食事が終わり、座位保持から降りるため机を外そうと後ろに回ると、机に手をかけて外すのを待っている。保護者に聞いてみると、家でも同じ様子が見られる。(しかし、これ以外に「次にすることを予想して待っている」シーンは見つけられなかった。)
終わりたいときに身体の動きに何か変化はある?	○食事中に、口に含んでいる物を吐き出して下に落とすことがある。「もういらないの合図」と引継ぎで聞いている。

〈表1と2を踏まえた考察〉

表1の※1より、A 君が見通しを持てるようにするためには、言葉だけでは難しいのではないかと感じ、他の見通しの立て方が必要であると考えた。

そんな中、表2の※2より、歩行器や立位台をガラガラと持ってくるとそれらに顔を向けて追いかける様子に注目した。表1の※3・4より、近い距離ならば見えており、音は問題なく聞こえているので、こういった様子は「歩行器を取りに行く大人の様子を見て」なのか「大人の足音を聞いて」なのか「歩行器や立位台の音」なのか「歩行器や立位台が見えたから」なのか、といった可能性が考えられる。しかし、まだ確信を持って断言することができないと感じた。そこで定点によるビデオ撮影を行うことで、A 君が意識を向ける様子を客観的に観察していき、A 君がどこで周りの様子をわかっているのか明らかにしていくこととした。

取り組み②

歩行器や車いすを持ってくると、A 君はわかっている様子が見られるが、どこで A 君は気付いているのか。他の支援者に観てもらったり、OAK を使って客観的な観察を行ったりして、実態を把握していくこととする。

〈観察条件〉

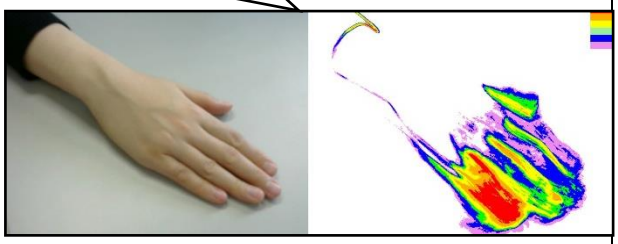
○姿勢…歩行器に乗っている

○記録…全身

○活用秒数…6秒

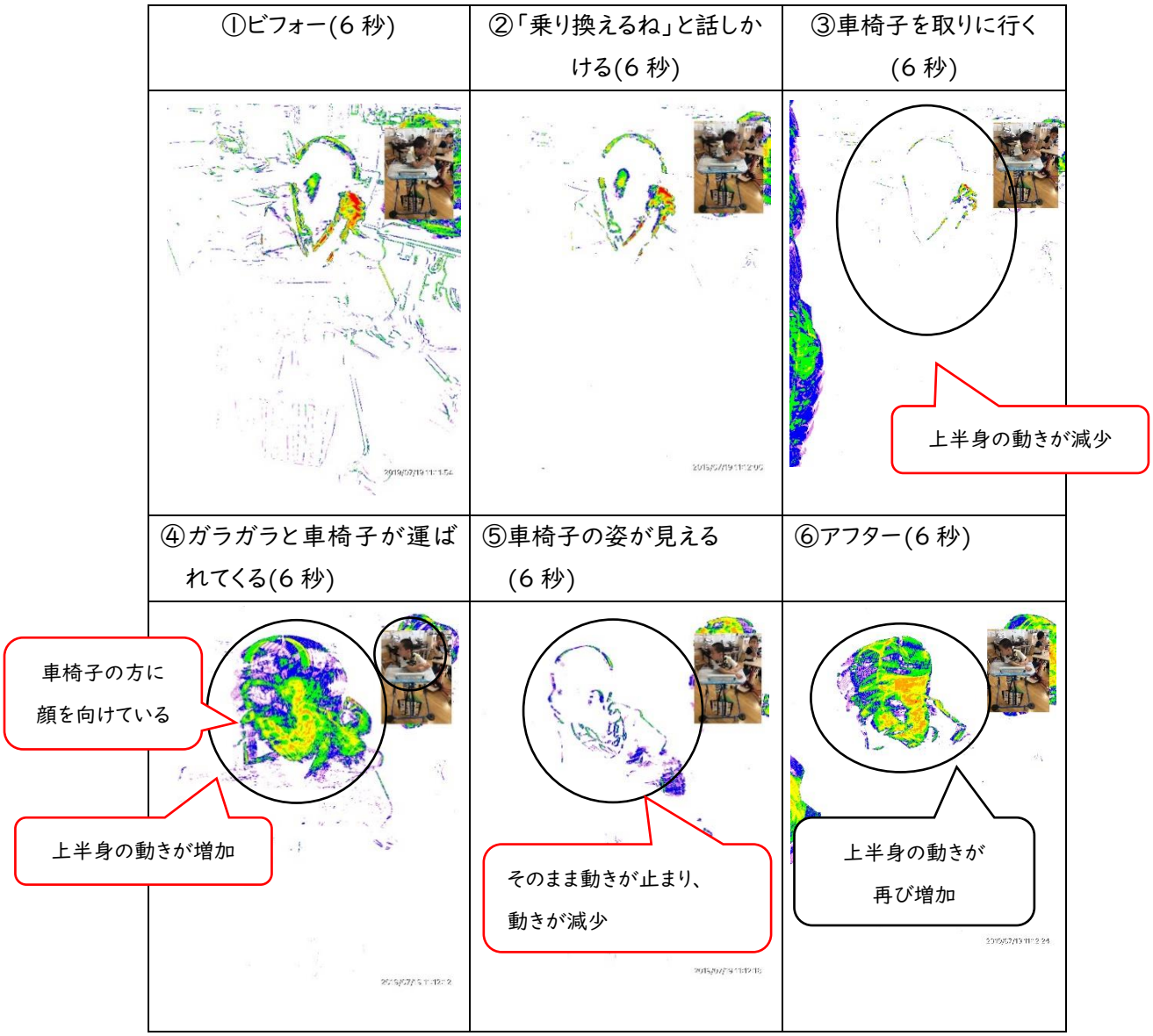
○日時…7/19(金) 11:15 頃　9/12(木) 14:00 頃

動きが比較的少ないところは青く、多いところは赤く、それぞれ色が変わっていく。



〈結果〉次のようになった。7/19(金)の分を図1に示す。

図1 OAK を用いた観察の結果 7/19(金)分



〈考察〉

OAK を活用した画像分析を行った結果を踏まえ、次の4点を考察する。

1点目、図1の②で A 君に声をかけた後、③でやや全身の動きが減少していることから、言語の意味を理解しているわけではないかもしれないが、何かしら声かけに反応している可能性が考えられる。

2点目に、その後図1の④ではガラガラと車椅子の音が鳴った時に車椅子に顔を向け、上半身の動きが大きく増加

し、他の支援者の目視による観察でも、「音がした時に表情が変わり、何か気付いたような気がした」というコメントであったことから、音が鳴った瞬間に音源の方向に注意を向け、それが何であるか確認しようとしているのではないかと考えられる。

3点目に、図1の⑤では、車いすの姿が見えた時にしばらく動きが減少していることから、運ばれてきたものが何であるか、目で見て確認しているのではないかと考えられる。

最後に4点目、これらの考察を踏まえた総合的な解釈として、A 君は音だけで全てを把握しているのではなく、音に加えて目で見て環境の把握を行っているのではないかと考えられる。そしてその際、目で見て確認している時には動きを数秒止め、確認ができたら動きが再び元の様子に戻るのではないかと感じた。

また、今回は車椅子の姿が“見える”より先に音が“聞こえた”のでこのような環境把握になったが、**⑤と④が入れ替わった場合はどうなのか、**同じく OAK を活用して画像分析を行うこととした。

次の観察は、A 君が比較的手を伸ばしやすいプラスチックのおもちゃのチェーンを用いて、やり取りを行った。

〈観察条件〉

○姿勢…立位台

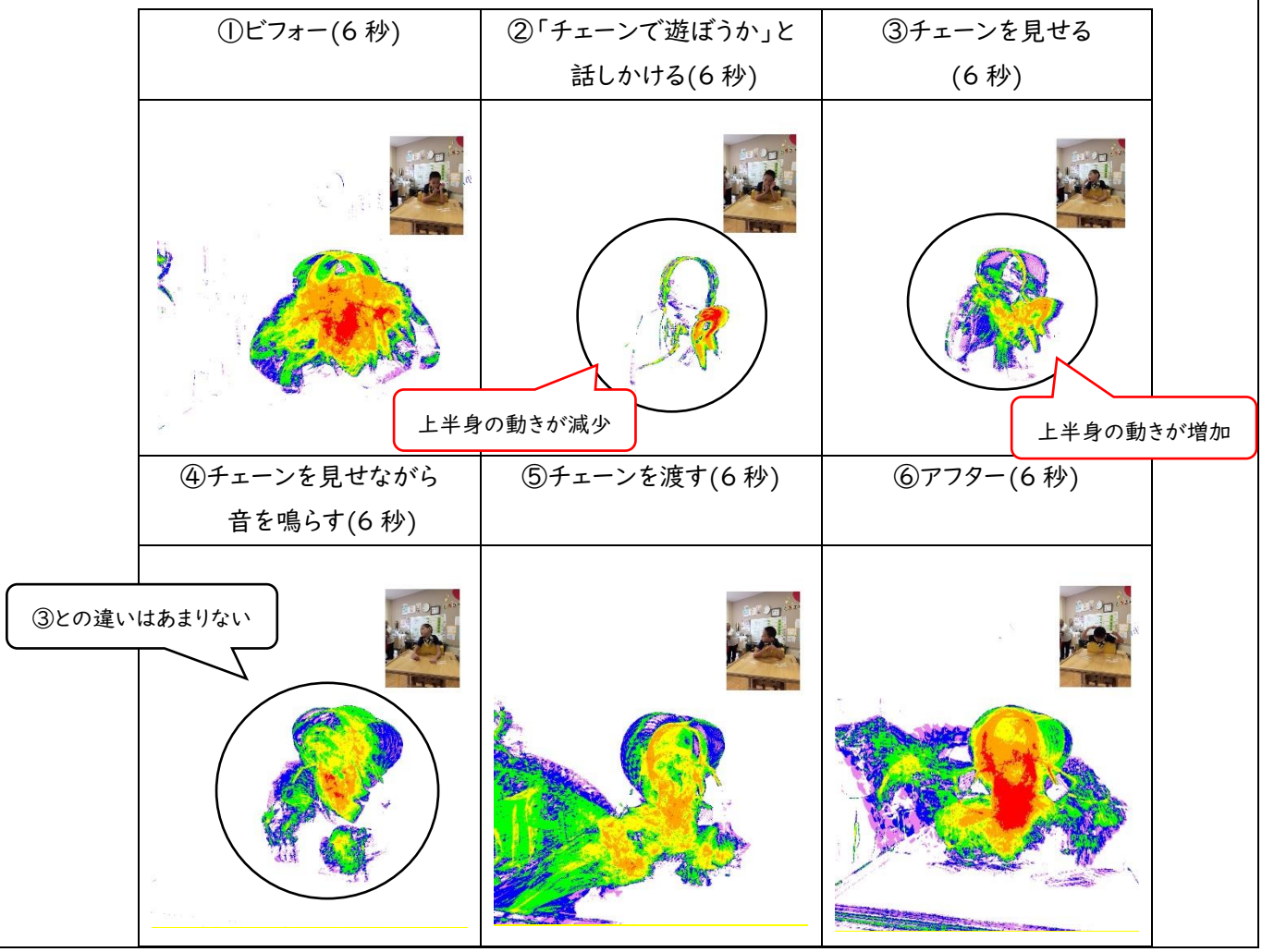
○記録…全身

○活用枚数…6秒

○日時…9/18(水) 13:15 頃から2回実施

〈結果〉次のようになった（図2）。

図2 OAK を用いた観察の結果



〈考察〉

OAK を活用した画像分析を行った結果を踏まえ、次の2点を考察する。

1点目。図2の②で A 君に声をかけた際に全身の動きが減少していることから、やはり言語の意味を理解しているわけではないかもしれないが、何かしら声かけに反応している可能性が考えられる。

2点目。図2の③で、上半身の動きが増加しており、④では動きに違いが見られない。このことから、目で見た時点で状況の判断が終わっていると考えられるのではないか。そこまで遠いところが見えているわけではないと考えられるので、全てを視力により環境把握しているわけではないが、目で見える範囲の物は、見ることで確認していると考えるのが妥当ではないかと考えた。

この辺りの考察を深めるため、次のことを行った。A 君は、“気づいたら手を伸ばす”様子がよく見られたので、チェーンを用いたやり取りで、「**どこで気づいて手を伸ばすか**」を観察していった。結果は次の通りである。

〈日時〉 9/24(火)10:30 頃、13:45 頃

〈観察条件〉

〇姿勢…立位台

〇使用するチェーン…A 君がいつも学校で使っているもの

〈結果〉

2回のやり取りはともに、OAK の観察と同じように、声かけの後、A 君から見えないところ（立位台の下）でチェーンの音をジャラジャラ鳴らし、その後 A 君に見せた。どちらも音を鳴らすだけでは手を伸ばさず、**姿が見えてから“チェーンに手を伸ばした。**

また、A 君にチェーンを見えないところから鳴らすと、2回とも少し A 君が嫌がる様子が観られた。

〈考察〉

A 君が手を伸ばすタイミングが“見えた”時であったことと、見えていない状態で音が鳴ると嫌がることがあることから、「事前に見せる」→「音を鳴らす」ということも、A 君に伝わりやすい提示の仕方である可能性もある。

〈取り組み②の総合的な気づきと考察〉

このように取り組み②の結果、目標1の「A 君がどのように周りの環境を把握しているのかを探る」では、次の3点がわかってきた。

1点目、A 君が聴覚や半径1mほどの視覚を元に、環境を把握していることが多い傾向が見えてきた。音が鳴るとそれらを確認しようと注意を向ける様子も見られたが、最終的な状況判断は「目で見て」行っていると考えられる。そこで **A 君に提示する際には、(1)A 君が見える範囲で提示する、(2)動きが止まっている間は目で見て確認していると考えられるので、動きが再び増加するまで待つ**、といったことに留意していくこととする。

2点目、声かけで動きがやや減少している様子も確認された。語句の意味を理解しているわけではなさそうだが、声かけになんらかの反応をしていると考えられる。**A 君に関わる際には、今後も事前の声かけを行いながら関わる**こととする。

3点目、提示の仕方としては、**「事前に見せる」→「音を鳴らす」ということも、A 君にとって伝わりやすい提示方法の一つである可能性が考えられる。**

画像１　取り組み②の結果わかったことを踏まえて、A 君との関わりを見直した

「今から〇〇をするね」と
まずは支援者が声かけ

見える範囲（半径１m程以内）で
提示する（そのまま少し待つ）

A 君の動きが戻ったり、手を伸ばし
たりする（A 君が状況を把握した）

しかし、日にもよるが、嫌がる音や活動がある A 君。これらの取り組みの結果わかったことを踏まえて、目標の2つ目「A 君が苦手な場面と過ごしやすい場面の両方を探る」に取り組むこととした。

～目標2　A 君が苦手な場面と過ごしやすい場面の両方を探る～

取り組み③

取り組み①と②でわかってきた A 君の理解を踏まえて、音や活動など、A 君が苦手な場面と過ごしやすい場面を探っていった。結果を表3にまとめる。

表3　A 君の苦手な場面と過ごしやすい場面

苦手な場面	〇ガラガラとした音のおもちゃが鳴っている（姿勢や見えている・いない関係なく）。 〇数種類の楽器が同時に鳴っている。 〇給食の準備をしている（食缶の音、ハサミで給食を切る音等が聞こえている）。 〇立位台に乗って長い時間（40分以上？）立ち続ける。 〇一人で何もすることがなく過ごしている（時間や姿勢に関係なく）。 〇物を使ったりペンを握ったりする活動、手を使った創作・制作の活動。 〇登校中の車内（下校時やディの車内は何もない）。
過ごしやすい場面	〇歩行器で歩く。 〇ボールプールに入る。・ 〇抱っこをしてもらっている。 〇チェーンを触っている。 〇食事を食べる。 〇外の風に吹かれる。 〇介助歩行で歩いている。 〇VOCA を押している。

〈考察〉

まとめてみると、一つの傾向として、苦手な場面には、**①音が鳴っている場面や②一人で何もすることがない場面を苦手にしていることが多かった**。家庭でも、「家では、一人で 30 分とか待つことが苦手な時があって…」ということを悩みの一つとして聞いていた。

逆に、過ごしやすい場面の傾向としては、**歩行器や介助歩行で歩いたり、チェーンを触ったりして動いている場面で落**

ち着いて過ごしていることが多かった。

中でも VOCA を押している場面が気になった。音楽を録音した VOCA を渡すと、VOCA を押す動きが見られた。その時に落ち着いて過ごしていることも度々見られた。音楽が聴こえているから他の苦手な音が聞こえないだけなのか、それとも VOCA の操作をして“おもちゃ”のようになっているのか、どちらかではないかと考えた。ただ VOCA は、目の前に提示されれば1回は押すが、その後は押さないか、ひたすら連打するかどちらかであった。そこで、VOCA の中の音楽を細切れにし、押せば続きが聞けるようにしてみた。すると、1ヶ月ほどすると、何度も VOCA を押すようになった。音楽が途切れたタイミングで押しているように見えるし、一定の時間で音楽とは無関係に押しているようにも見えた。そこで、**VOCA を押しているのは音楽が途切れたタイミングなのか、OAK を使って観察することとした。**

〈目的〉　VOCA を、音楽が切れたタイミングで意図的に押しているのかどうか探るため。

〈観察条件〉

○姿勢…立位台（他の姿勢では全身が動いてしまい、記録が取れにくいため）

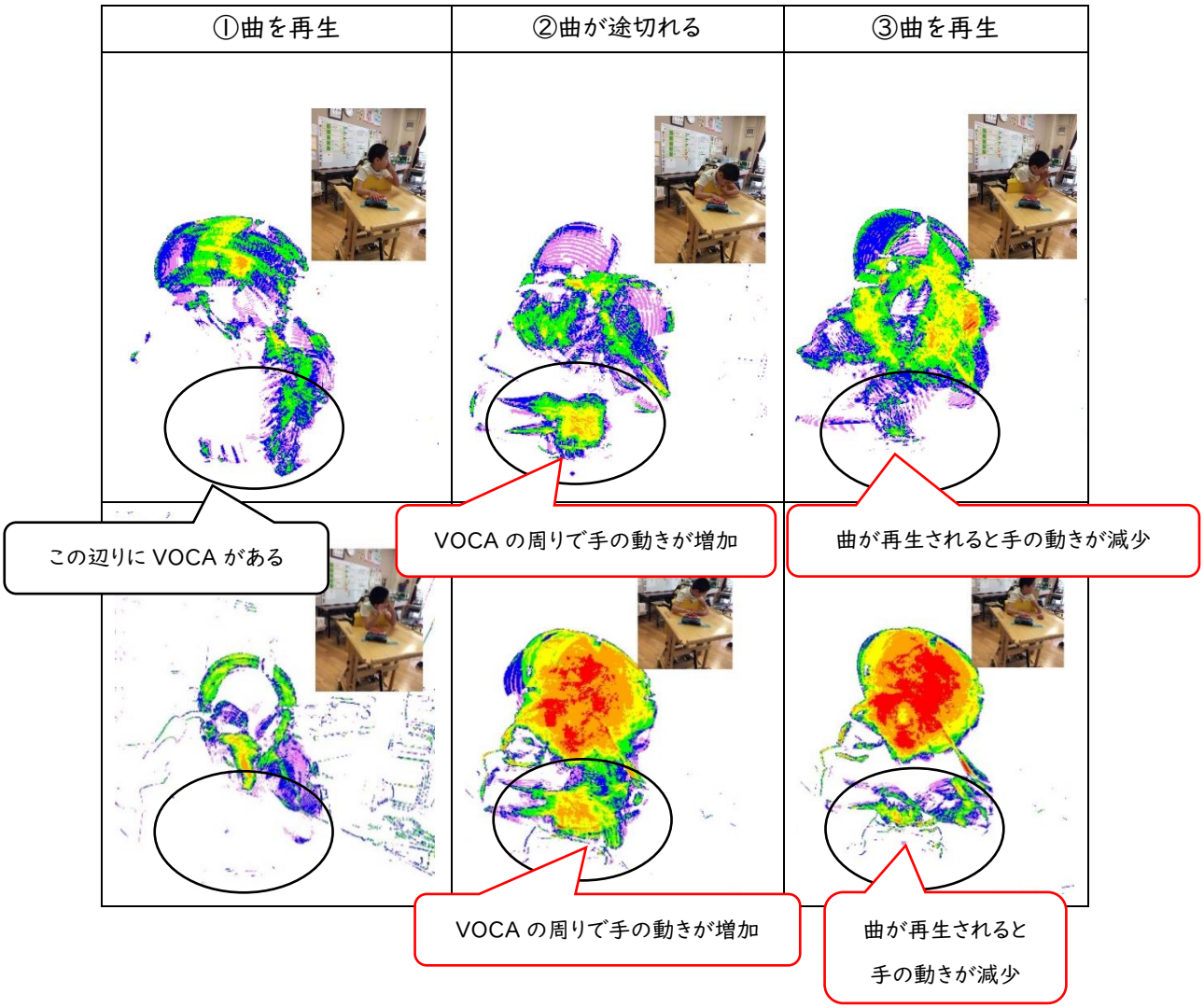
○記録…上半身（VOCA を押す様子に関係する部分であるため）

○活用秒数…10 秒

〈日時〉7/10(水)　10:30 頃

〈結果〉次のようになった（図3）。

図3　OAK を用いた観察の結果



〈考察〉

このように、図3の②で曲が途切れると VOCA の周りで手の動きが増加し、③で曲が再生されると手の動きが減少することがわかった。実施した2回とも、同じ結果となったことから、A 君が**意図的に音楽の途切れたタイミングで VOCA を押している**ことが考えられた。

しかし、もう少し A 君のことを正確に知るため、条件を変えるとどうなのか、探ってみた。

〈目的〉　条件を変えるとどのような動きがあるのか調べる。

〈結果〉

○「曲を変えてみてはどうか？」と思い他の曲に変えてみると、ほとんど押さなかった。すぐに元の曲に戻すと再び押した。

○曲のボリュームを少し小さくすると、変わらず押したが、かなり小さくすると、VOCA をしばらく連打した後、押さなくなった。

○VOCA の位置を前後左右に場所を変えてみても、変わらず押した。

○立位台ではなく床に降りている時にそっと VOCA を置くと、変わらず押した。（こちらの方が楽しそうに押しているように思う）。日によって右や左、遠くや近くなど置く場所を変えても同じように押していた。

○VOCA が電池切れになると、連打した後、手を噛んだ。

○VOCA のスイッチを入れ忘れた時があったが、その時に VOCA を連打した後、VOCA を投げようとした。

○ボタンが2つあるタイプの VOCA を使用し別々の音楽を入れてみたが、どちらのボタンも押す頻度はほとんど変わりがなかった。

〈考察〉

曲を他の物に変えると押さなくなり、元の曲に戻すと再び押したことから、曲はある程度意識、もしくは認識している可能性がある。しかしボタンが2つあるタイプの VOCA では押し分けることがなかったことから、曲調の細かな違いまでは認識していないかもしれないと考えた（どちらの曲にもそこまで興味を示していないので押し分けていない、という可能性もある）。また、ボリュームを小さくしても聞こえているようなので、聴力に大きな問題はないと考えられる。他にも、VOCA の位置や押す時の姿勢が変わっても戸惑っていないと考えられる。

取り組み④

取り組み③を踏まえて、A 君にとって過ごしやすい環境を整えることを行った。次の2つを行った。

(1) 給食準備の時に、食缶やハサミの音が苦手である。準備の間は音が聞こえないよう、可能な範囲で教室の外で過ごすようにする。

(2) 立位台で立つ時に VOCA を押せるようにしておき、VOCA を押して音楽が聴けるようにする。

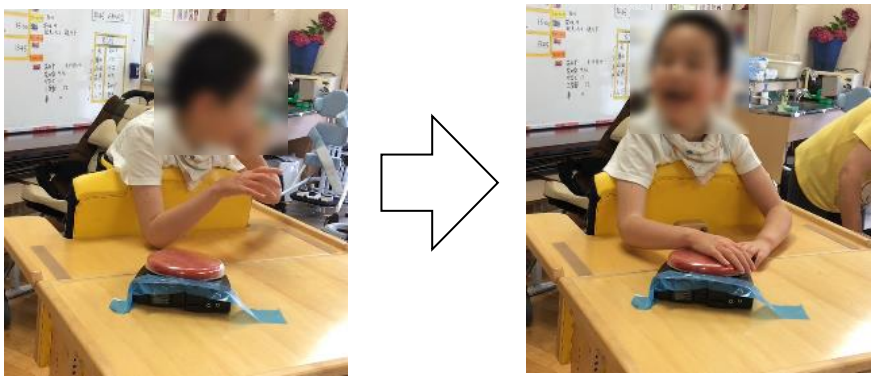
〈結果〉

(1)の給食準備の時は以前、かなりの割合で手を噛んだり嫌がるような声を出したりしていたが、音が聞こえない場所で待つようにしてから**そういったことはほとんどなくなった**。他にも、A 君の苦手な楽器の音等が鳴らないように配慮することで、**教室で落ち着いて過ごせるようになった**。

(2)2ヶ月ほど同じ VOCA を使用すると、因果関係を理解してきたのか、以前よりも音楽の切れ目にタイミングよく VOCA を押し、**VOCA の操作をして一人で過ごせるようになってきた**。そして、**立位台に立つことができる時間がかなり長くなった**。3学期になると、むしろ、立位台に乗っている時が一番落ち着いて過ごすことができる時間となってきた。

画像2　A 君が VOCA を押している様子

曲が途切れると　　VOCA を押して続きを再生



〈考察〉

苦手な音が聞こえにくいよう配慮することで、今より少し楽に過ごせることが増えるのではないかと考える。状況や場面により全てのことに対して同じことができるわけではないが、状況により配慮できるものは配慮してもよいかもしれない。

また、VOCA を操作して過ごすことで、活動に参加できる場面が一つ増えたと言えるのではないかと考えらえる。しかし、立位台に立つ時間が長くなったのは、立位台に慣れてきたこともあるのかもしれないので、VOCA との因果関係は慎重に考える必要があると言えるであろう。

～目標3 どのようなことをどのように表出したりしているのかを探る～

取り組み⑤

A 君がどのようなことをどのように表出したりしているのかを探るため、コミュニケーションサンプルを用いて、A 君の表出方法をまとめてみた。

〈方法〉

コミュニケーションサンプルを実施し、A 君の1日の様子を1週間続けて記録していく。その時に出た A 君の表出を、どんな機能を持った物か（要求・注意喚起・拒否・その他）、予想しながら記録していった。活動全てを対象とした。記録したサンプル数は、226であった。（使用した記録表は表4）

表4　使用した記録表

場面	児童の様子	機能				どこで	誰に	備考
		要求	注意喚起	拒否	その他			

〈結果〉

次のようになった（表5、6）。

表5　コミュニケーションの機能ごとの分類分け

機能	要求	注意喚起	拒否	その他
回数（回）	10	90	44	82

表6 表出の様子

様子	首を背ける	物に手を伸ばす	人に手を伸ばす	手を噛む	涙を流す	ロッキング	大声を出す	手で払いのける
回数（回）	24	8	26	68	10	25	41	20
機能	拒否	要求 その他	注意喚起・ その他	注意喚起 ・その他	注意喚起 ・その他	注意喚起 ・その他	注意喚起・ その他	拒否

〈考察〉

コミュニケーションサンプル実施の結果、A 君は、注意喚起、つまりは、人を呼んでいるのでは?と考えられる行動が多かった。拒否は、首を背けたり、手で払いのけたりして、できていた。

これらより、大きな声を出したり手を噛んだりロッキングしたりする以外の方法で、「人を呼ぶ」方法を身に付けられたらよいのではないかと考えた。そこで、VOCA を活用して、人を呼べるよう取り組んだ。

〈目的〉

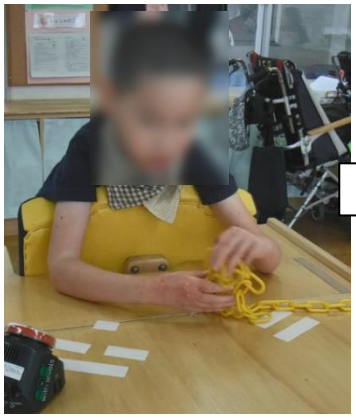
大きな声を出したり、手を噛んだり、ロッキングしたりする以外の方法で人を呼ぶ方法を身に付ける。

〈方法〉

「こっちに来て」というメッセージが録音された VOCA を、A 君が手を伸ばせば届く位置に配置していく（A 君は物を投げる癖があるので、マジックテープで固定しておく）。その状況で、A 君がいつも使っているチェーンを渡す。チェーンを A 君が床に落としても回りの大人は拾ったりせずに、A 君が何かアクションを見せたら、A 君の手を取り、VOCA の近くまで誘導し、VOCA を押させる。

〈実際の様子〉

画像3 チェーンで遊ぶ A 君



画像4 チェーンを落とすと

画像5 A 君が VOCA を押し

右手で VOCA を押している。

画像6 呼ばれた支援者から チェーンを受け取る

〈結果〉

VOCA が設置されている場所が左側ばかりだと、左側にある VOCA をとりあえず押す、ということになりかねないと感じたので、右側にも VOCA を設置し、押すかどうかの様子を見ていくこととした。

また、チェーンを落とすと、少し悲しい顔をして、手を噛むこともあったが、VOCA を押した後にチェーンを受け取ると、元の様子に戻り、またチェーンで遊ぶ様子が何回か見られた。

〈考察〉

A 君がこのように、**大声を出したり、手を噛んだりする以外の方法で「人を呼ぶ」ことができる可能性がある**と考えられる。しかし VOCA だけでは、誰にでも伝わりやすい反面、持ち運びの難しさや姿勢を変えるごとに VOCA を移し替えなければならない手間もあり、A 君にとっては「いつでもどこでも簡単に」使えるわけではないと感じた。しかし他の方法が難しければ VOCA の活用が有効であると考えられる。そういった点も踏まえながら、VOCA の活用やその他の方法（例えば手で机をトントンとしたり、両手を叩いたりするなど）の中で、どのような方法が A 君にとって最も使いやすいかを考えていくことと、それらを使って日常生活の様々な場面で「人を呼ぶ」ことを身に付けることの2つを、今後の課題とする。

【報告者の気づきとエビデンス】

一つ一つをじっくり観察しながら A 君を理解することに努めた結果、次のようなことがわかった。

〈わかったこと〉

・A 君は、足音や、大人が物を取りに行っている様子で物事を把握するよりも、実物が確認できる範囲で見えた時に状況の判断をしていると考えられる。

・それを踏まえて、A 君に提示する際には、(1)A 君が見える範囲で提示する、(2)動きが止まっている間は目で見て確認していると考えられるので、動きが再び増加するまで待つ、といったことに留意していくと、伝わりやすい可能性がある。（次年度この見立てが適切かどうか、確かめていくこととする。）

・言葉の詳細な意味を理解しているわけではないと考えられるが、声かけに対して反応している様子が確認できた。

・「事前に見せる」→「音を鳴らす」という伝え方が、A 君に伝わりやすい提示方法の一つである可能性がある。

・苦手な音があるが、聞こえないように配慮することで、教室で落ち着いて過ごせる。

・A 君の、大きな声を出したり手を噛んだりする様子は、人を呼んでいることもあるのではないかと考えられる。

・大声を出したり手を噛んだりする以外の方法（VOCA の活用など）で、人を呼ぶことを身に付けられる可能性がある。

〈今年度の取り組みの成果〉

・VOCA を押して音楽を聴くことで、落ち着いて過ごすことができた。

・学校生活において、落ち着いて過ごせる時間がかなり長くなり、参加できる活動が増えた。また、コミュニケーションサンプルの事後も、同じく1週間の期間で実施した。結果は表8の通りである。

表7 コミュニケーションサンプルの結果（事前、表6より抜粋）

様子	手を噛む	涙を流す	ロッキング	大声を出す	合計
回数（回）	68	10	25	41	144
機能	注意喚起・その他	注意喚起・その他	注意喚起・その他	注意喚起・その他	

表8 コミュニケーションサンプルの結果（事後）

様子	手を噛む	涙を流す	ロッキング	大声を出す	合計
回数（回）	45	6	25	24	100
機能	注意喚起・その他	注意喚起・その他	注意喚起・その他	注意喚起・その他	

少なくなった

このように、手を噛んだり、涙を流したり大声を出したりといった行動が減っていることがわかった。また、手を噛むことや大声を出すことなどは減っているが、ロッキングは減っていない。これらのことより、ロッキングする行為は、人を呼んだりパニックになったりしているのではなく、自己刺激か何かである可能性が高いと考えた。

また、取り組み③で調べた A 君の苦手な活動や時間帯のうち、“給食の準備をしている（食缶の音、ハサミで給食を切る音等）”、“立位台に乗って長い時間（40分以上？）立ち続ける”、“一人で何もすることがなく過ごしている（時間や姿勢に関係なく）”の3つに関しては、取り組みにより、解決することができた（表9）。

表9　A 君の苦手だった場面（表3より抜粋）

苦手な場面	○ガラガラとした音のおもちゃが鳴っている（姿勢や見えている・いない関係なく）。 ○数種類の楽器が同時に鳴っている。 ~~○給食の準備をしている（食缶の音、ハサミで給食を切る音等が聞こえている）。~~ ~~○立位台に乗って長い時間（40分以上？）立ち続ける。~~ ~~○一人で何もすることがなく過ごしている（時間や姿勢に関係なく）。~~ ○物を使ったりペンを握ったりする活動、手を使った創作・制作の活動。 ○登校中の車内（下校やディの車内は何もない）。

また、エピソードとして、次の3つを紹介する。

1つ目。以前の A 君は、授業中に手を噛んだり大声で泣いたりすることが多く、クールダウンのため教室の外に出ることが少なからずあった、しかし、まだまだ手を噛んだり大声を出したりすることはあるものの、クールダウンが必要そうな場面はほとんどなくなり、2020年の2月現在、授業中にクールダウンを行うことはなくなった。また、授業中、声を出して「フフフ」「アハハ」と笑顔で笑うことが増えてきた。

2つ目。同じ学部の教諭や他学部の教諭、養護教諭など様々な大人からも、校内ですれ違ったときに「A 君、落ち着いて過ごせるようになったね」「成長したね」と声をかけられるようになった。

3つ目。A 君がよく噛んでしまう右手の甲は、ガサガサになったり、切れて出血したりすることがある。特に冬場は乾燥もあり、尚更であった。しかし、穏やかに過ごせることが増え、右手の甲は以前よりきれいになってきた。

以上が、今年度の取り組みの成果である。

〈A 君から学んだこと〉

最後に、A 君と一緒に過ごして、感じたことである。A 君にとって「よりよい生活」を考えていくにあたり、まずは A 君のことを理解していくことは欠かせないと、改めて感じた。その際に、主観的な判断だけでなく、客観的な観察や記録、データ、ICT の活用なども行いながら総合的に判断していくことにより、A 君への理解が少し正確に、そして深まるようになってきた。簡単に決めつけすぎないこと、そして、一つ一つの仕草や動きをじっくり確かめながら子ども理解を深めていくことの大切さを、この1年間で A 君から学んだように思う。

今後も、子どもたちの声を聞きながら「よりよい生活」を一緒に作り上げていける支援者になれるよう、彼らに寄り添っていきたいと思う。